

内村鑑三著「後世への最大遺物・デンマーク国の話―教師は尊い―」ワイド版岩波文庫、岩波書店
1991年6月26日刊を読む

1. 私がたいへん世話になったアーマスト大学の教頭、シーリー先生がいったことばに、「この学校で払うだけの給金を払えば学者を得ることはいくらでも得られる。
地質学を研究する人、動物学を研究する人はたくさんいる。
しかしながら、地質学、動物学を教えることのできる人は、極めて少ない。
文学者はたくさんいる。しかしながら、文学を教えることのできる人は少ない。
それゆえに、この学校に、三、四十人の教授がいるけれども、その三、四十人の教師は非常に尊い。なぜなら、これらの人は学問を自分で知っているばかりでなく、それらを教えることのできる人であります」と。
2. これは、われわれが深く考えるべきことで、われわれは、学校を卒業さえすれば、必ず、先生になれるという考えを持ってはなぬ。
学校の先生になるということは、一種、特別の天職だと、私は思っております。
よい先生というのは、必ずしも、大学者ではない。
3. 私どもが札幌におりました時に、クラーク先生という人が教師であって、植物学を受け持っておりました。
その当時には、他に植物学者がおられませんから、クラーク先生が第一級の植物学者だと思っておりました。
しかし、彼の本国に行って聞いたら、ある学者が、クラークが植物学について口を利くなどとは不思議だといって笑っておりました。
4. しかしながら、とにかく、クラーク先生は、非常な力を持っておった人でした。
どういう力であるかというに、すなわち、植物学を青年の頭に注ぎ込んで、植物学という学問のInterest(インタレスト)を起こす力を持った人でありました。
それゆえに、植物学の先生としては、非常に価値のあった人でありました。
5. ゆえに、学問さえすれば、われわれは先生になれるという考えを、われわれは持つべきではない。
われわれに、思想さえあれば、われわれがことごとく先生になれるという考えを、放却してしまわねばならぬ。
先生になる人は、学問ができるよりも、――学問はなくてはなりませぬけれども――
学問ができるよりも、学問を青年に伝えることのできる人でなければならない。
これを伝えることは、一つの技術であります。

6. 短い言葉ではありますが、この中に非常の意味が含まっております。

たといわれわれが、学校の先生になりたいという望みがあっても、これは誰にでもできるものではないと思います。

P57 ~ 58

<コメント>

内村鑑三先生は、人が死んだあと、後の世(後世)に遺せるものとして、5つ紹介しています。

- (1) お金・・・お金を遺し、奨学金などに役立てる
- (2) 事業・・・事業(仕事)を遺し、社会に役立てる
- (3) 本・・・作品を残し、思想を伝える
- (4) 教育・・・大切なことを教える
- (5) 生き方・・・あのような生き方をした人がいたな

「後世に遺せるのは、教育」であることを、的確に示唆していただき、学習塾・予備校・日本語学校の先生方にとり、こんなにありがたい応援歌はないと考えます。是非、じっくりお読みください。本書とともに、参考になるのは、「代表的日本人」岩波文庫です。ご一緒にお読みください。よろしく願いいたします。

お体大切に。

2026年2月13日(金)12時01分